

「二上山に偲ぶ」 — 大津皇子山頂墓 —

1. はじめに

今、大津皇子の墓は二上山山頂にあるとされている。しかしながら7世紀後半に古墳(墓)が山頂に造営されることはありえない。それでは何故、大津皇子の墓は二上山山頂にあるとされたのだろうか。この決定に至る背景には、何らかの、そうならしめた要因があるに違いない。その要因は何か、それをここでは探りたい。

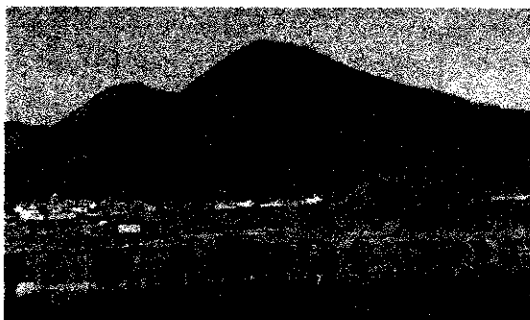


大津皇子像

2. 二上山山頂墓

標高 517mの二上山雄岳山頂に葛木二上神社が鎮座し、その東側、幾分下がった平地に皇子の墓はある。形式は円墳で、高さ約 3.4m、径は 10~12mの東西に長い、西向きの小墳丘で築かれている。陵墓面積は 196 坪余、周囲は柵で囲み、西に宮内庁指定の高札が立つ。

二上山と山頂墓



3. 移葬にかかわる文献史料の埋没と復活

大津皇子の二上山への移葬にかかわる文献史料(記述・記録類)は、『万葉集』のなかでの記述の後、永い歴史のなかで見えなくなり、再び登場するのは江戸時代に至ってからである。

(1)当初の移葬記録

移葬がなされたことは、『万葉集』巻第 1-165,166 番歌の題詞に記述されている。「大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷しびて作らず歌 二首」ここにいう移葬が行われた時は、持統天皇称制元年(687)春と推定されている。ここで大事なことに触れておかねばならない。題詞は「二上山に移し葬る」と記述し、「二上山山頂に

移し葬る」と云っていないことである。このことが、今後の論点の重要な鍵となる。

(2) 文献史料の埋没と伝承

移葬の行われたのち、飛鳥から奈良時代に至る往時の人々は、大津皇子を思い、同情の目で二上山を眺めたに違いない。それだからこそ、この事実が『万葉集』に記録として残ったといえる。平安時代に入り、『万葉集』の訓詁が進められたなかで、多くの人々が165、166番歌に目を通す機会もあったと思われる。しかしながら平安時代に、大津皇子の移葬にかかわる記述(文献史料)は新たにみられない。以降、歴史の流れの中で、大津皇子の二上山への移葬にかかわる文献史料は見られず、いわば時の流れのなかに「埋没」してしまった状況となったのである。

一方、往時の人心に訴え、同情を集めたであろう二上山への移葬は、都人はもちろん、特に二上山周辺の人々の伝承として残り続けたであろう。人から人へ、時代から時代へ、人々の伝承・口碑として残ってきたと思われる。しかしながら伝承は、「時代とともに絶えず流動する。流動し、変化し、その語られる時代の姿に変えていく」[註1]。大津皇子の移葬と墓所についても、その語られる時々姿を変えながら、語り伝えられたと思われる。

(3) 文献史料の復活

江戸時代に入ると「地誌」、「案内記・紀行文」が盛んに刊行され、そのなかで二上山に関する記述[註2]に関連し、大津皇子墓への言及がみられるようになった。

① 『万葉集』移葬にかかわる題詞、165番歌の記述されたもの初見

◎延宝9年(1681) 林宗甫 『和州旧跡幽考』

「二上嶽 二上山ともいへり。葛城山の内にあり。大津皇子の墓を二上山に移し葬る時に、大伯皇女の悲傷しびて作らず歌。

うつそみの 人にある我や 明日よりは、二上山を 弟世と我れ見む」

二上山の関連として『万葉集』記載事項をそのまま転載している。

② 「大津皇子、二上山に葬」記述の初見

◎元禄10年(1697) 『日本国花万葉記』

「二上嶽 二上山ともいい、葛城山の内なり。二上山、大坂山は各々同山異名なり。大津皇子二上山に葬る」

万葉記の性格から、大伯皇女の歌詠に関連し、言及されたものと思われるが、大津皇子を二上山に葬ったことを記す江戸時代初見の記述である。

③ 「大津皇子二上山山頂墓」記述の初見

◎享保21年(1736) 並河誠所 『大和志』 [註3]

「二上山 葛木二上神社二坐二上山頂に在り。今権現と称す。

二上山墓 大津皇子 二上山二上神社の東に在る」

この地誌『大和志』のなかで、直接的な記述ではないが、山頂にある葛木二上神社の

東に在るとの表現で、山頂墓に言及している。これが「山頂墓」に関する初見の記述である。

次に『大和志』刊行の前後する時期で、当時の権威ある識者の案内記・紀行文での「二上山山頂墓」についての言及を点検しておく。

◎元禄9年(1696) 貝原益軒 『大和廻』

「二上が岳 丸子山の上であり、二上山と云う名所なり。葛城山につづけり。北に在るを雄岳と云い高し。南を雌岳と云ひきし。両山ならべり。故に二上が岳と云う」
山頂墓についての言及はない。

◎明和9年(1772) 本居宣長 『菅笠日記』

飛鳥を訪れ、天の香具山から、西に見える山々を遠望し、

「金剛山・葛城山の北に、やや隔たりて二上山、峰ふたつ並びて見ゆ。これも今は、二上が岳と、例の文字の声に言ひなせるこそ憎けれ」と記述している。

『大和志』刊行後の紀行文であるが、ここでも山頂墓についての言及はない。

先にみたように、江戸時代に入り地誌、案内記等のなかで、二上山の天津皇子墓への言及が見られるようになり、『大和志』では、間接的な表現ながら「墓が山頂に在る」との場所の特定まで行っている。何を根拠に『大和志』は、天津皇子の山頂墓の特定を行っているのだろうか。それを次に検証したい。

4. 『大和志』の検証

(1) 『大和志』とは何か

正式の名称は『日本輿地通志・畿内部』である。「輿地」とは地理の意であり、明治以前の言い方である。「志」は歴史書で使用される用語で、天文・地理・礼楽・神祇などを記述した部分を云い、ここでは「地理」を記述している。また、畿内部の名称は、本来は国内をより広く、網羅することを意図して着手されたが、板行流布に至ったものが畿内五か国分だけであったことから、畿内部の名称がついている。『五畿内志』とも通称される所以である。

『大和志』は、このうち『山城志』、『摂津志』などと並び、大和国の地誌を記載している。この『日本輿地通志』で重要なことは、作成の過程で領国をまたぎ行う踏査・調査・聞き取り等について、予め幕府の許可をもらって行っていることであり、江戸幕府による最初の官撰地誌ともいわれている。

(2) 『大和志』作成時の社会的背景

『大和志』が作成されたのは、江戸・享保の八代将軍徳川吉宗の時代である。吉宗は質素を旨として享保の改革を進め、詩歌・文学といった情緒的なものには関心を向けず、実用的・実証的な学問を好んだ[註4]。また、地図が大変好きで飽かずそれを眺め、地誌にかかわる書籍も集めたといわれている。このことが背景となり、この時代に風潮として地誌の作成が

盛んになった[註5]。

(3)作成編纂者

○関祖衡 生没年不詳、享保1～14年(1716～29)頃死去

地誌学者にて越前の人。地誌に関する古記に考証を加え、領国ごとの地図の作成を行う。

『日本輿地通志』の作成を並河誠所とともに企画し、着手したが、道半ばで倒れ、後を友人の並河誠所に託した。

○並河誠所 1668～1738

京都出身の儒者。名は永、字は宗永、弟・並河天民とともに伊藤仁斎に学ぶ。関祖衡の遺志を継ぎ、官撰地誌『日本輿地通志』(畿内版)の作成・編纂に従事した。作成には久保重宣以下9名も加わり助けている。享保14年以来、5年を費やし享保19年2月に上書した。官撰地誌となっているが、幕府が上からの命で作成させたものではなく、「民の作成」に官として承認を与えたものである。

(4)作成・編纂方法

並河誠所らは、その作成・編纂に際して、「各地を巡歴して、その地理を相し、古文書・古記録を収集し、伝承・歌謡などを採訪し、それら史料を根拠に記述を進めた」[註6]。実際に現地に出向き、古い記録の収集、土地に伝わる伝承を聴取する手法は、その後の地誌編纂にも、かなりの影響を与えたという。また、個々の記録内容も精密で、のちの地誌、名所図会類にも盛んに引用され、現在もなお十分利用できる史料とされている。

5. 山頂墓を特定する『大和志』の評価

それでは我々は、大津皇子の墓が「二上山二上神社の東に在る」との記述を行う『大和志』をどう評価したらよいのであろうか。

(1)『大和志』の作成・編纂上の問題点

大津皇子の墓について、当時は考古学上の発掘史料はない[註7]。文献史料についても、確たるものは、当初の『万葉集』題詞の「二上山に移し葬る」で、その他の古い記録等の存在は考えられない。ただ、土地に伝わる伝承は残っていたと思われる。

悲しく、憐憫の情を誘う事例は、いつの世も、消えることなく語り継がれる。しかしながら千年の月日の経過は永く、伝承も流動化し変容する。実の「大津皇子の墓所」は人々の視界から消え、消えずに残る同情の念が、墓を「山頂へ」押し上げ、それが伝承として語り継がれていたのではないだろうか。『大和志』の記述者は、二上山山頂に臨み、『万葉集』の記述、伝えられている地元伝承に、自分の想いも加え、大津皇子の墓は「二上山二上神社の東に在る」との記述につなげたと思われる。このなかで、「墓所」の特定のうえで最大の拠りどころは、地元伝承であったと思われる。しかしながら、既にみたように、伝承は流動し、姿

を変える。伝承を史的事実と捉えることには、危険が潜在することを本居宣長は『菅笠日記』のなかで指摘し、併せて、伝聞聞き取りにもとづく『大和志』の評価を行っているので、次にみてる。

(2)『菅笠日記』にみる伝承の問題点と『大和志』の評価[註8]

①伝承の問題点

本居宣長は、日本の古代史の学問的先駆者である。その著作、業績は、古代への深い洞察と理解にもとづき、現代でも拠りどころとするに問題はない。宣長は、明和9年(1772)3月、43歳の折に、同行6人とともに伊勢から大和への旅に出立した。大和の山陵、旧跡、古社等の古跡探索が目的であった。宣長一行は、途上大和の山陵を訪ね、その被葬者に関心を示し、地元の古老に、その伝承されていることを尋ねるが、納得できることが少なく苦勞する。一例を示す。一行は飛鳥の野口という里に至る。やや高くのぼる岡のうえに、一つの御陵がある。(一つに天武・持統陵の可能性[註9])この陵について、周囲のだれに尋ねても武烈天皇との答えが返り、嘆いている。

「これを武烈天皇陵と申すなるは、所違えて覚えし故に。その辺りにて、此れ彼に問ふに、みな然いへるは、いかなることにか」。ここでは、地元民の伝承、言い伝えを大いに問題にしているのである。

②本居宣長の『大和志』の評価

伝承についての、このような認識にもとづき、宣長は『大和志』について、次のように評価を下している。

「里人の伝えも、もはら頼みがたくこそ。先頃、並河の何某[註10]が、五畿内志という書を作るとて、公にも申して、その国々所々を細かに巡り歩いて、かかる事も、いといと懇ろに尋ね奉りし事、此辺の里人も、年老いたるは覚え居て、その折、しかじかなど語るなり。げにかの書には、何の跡は、その里のそこにあり、その村に、今は何といふ塚なん、その御陵なるなどやうに、いと定かに記したるは、なにを証に定めつるにか。無下に近きことなれど、その世までは、なほ里人もよく弁へ知り居て、語りけるにや。又推し当てにも定めつるにやと、疑はしきこと、はた多かるを、此度かくここかしこと、かつかつも尋ぬるに、とかく定かならぬにつけては、さまでも詳らかには、いかにして尋ね得けん、功の程は、おぼるげならず思ひ知らる」。

長い引用となったが、宣長は、『大和志』の伝承・言い伝えにもとづく事柄の裁定、特定に疑問を投げかけているのである。

(3)山頂墓を特定する『大和志』の評価・結論

ここまでの言及から、大津皇子の墓は「二上山二上神社の東に在る」、つまり山頂に在るとする『大和志』の記述には、慎重に対処する必要がある。しかしながら、先に触れたように、同書は、実証にもとづく記述を個々に精密に行い、評価される面もあり、当時の官撰地

誌とも認識されていたので、その内容は、そのまま流布していったと思われる。つまり『大和志』の発刊以来、「大津皇子の墓は、二上山の山頂にある」との認識が、じわりじわりと広く社会に浸透していったと思われる。

6. 明治政府宮内省による「山頂墓」の考定

山頂墓にかかわる伝承、さらには官撰地誌への記載による流布が、さらに公に確定されるのは、明治政府宮内省による考定によってである。

(1)江戸時代の諸陵の探索調査・修陵

天皇・皇族の陵墓について、江戸時代に改めて探索調査・修陵が行われた。元禄時代に始まり、特に江戸時代後期の尊王思想の高揚により、享保・文化・安政・文久と陵墓の探索と修復が継続的に行われた。このことが、明治に入り行われる陵墓の探索調査・修陵の素地となった。

(2)明治時代の諸陵の探索調査・修陵

江戸時代末期の山陵調査は明治政府に引き継がれるが、王政復古による新政府の諸施策、そのなかでの天皇の行幸を契機とする「第1期」と、天皇制国家が名実ともに完成期となり、それにふさわしい体制整備の「第2期」と、2回にわたって行われた。

① 第1期 明治7年(1874) ～ 明治14年(1881)

② 第2期 明治22年(1889)

このなかで、大津皇子の二上山山頂墓の考定は、①の第1期に行われた。

(3)考定前の状況整備の記録

明治政府宮内省は、御墓の考定に際して、墓の兆域の拡張を行っている。昭和2年3月発行の『大阪府史蹟名勝天然記念物 第一冊』は、次のように記している[註11]。

山頂陵墓地は「元兆域20坪余にして、老松の下に一基の石燈籠あり。明治5年宮内省にて御墓査定の際、兆域80坪に拡張して、二上神社より買取せり。その後しばしば修築して、今日に至る」。

これによると、墳丘の有無は不明であるが、元の兆域とされる場所は、20坪ほどで狭く、松の老木の下に石燈籠が一基立っていた。墓の考定前は、この状況であったのである。

(4)宮内省による山頂墓考定の記録

明治9年(1876)宮内省は、二上山「山頂墓」を大津皇子の墓と考定した。これにかかわる宮内庁保管の手紙の写しを和田萃氏が紹介している[註12]。

「宮内庁書陵部に旧図書寮から移管された「御陵墓往復書類」があり、そのなかに教部大輔 宍戸璣から修史局総裁伊地知正治に宛てた明治9年10月4日付の手紙の写しがある。それ

によると、同年2月から9月までの間に、天武天皇皇子の大津皇子御墓が大和国葛下郡二上山に決定されている」。

どのような根拠にもとづき、この決定を行ったのか疑問も残るが、先にみた明治の山陵調査①第1期のなかで考定作業が進められたことは間違いない。この考定ののち、墓域の整備も行われ、現状の姿に整えられたものと思われる。ここに至り、二上山山頂墓が、大津皇子墓と公に認められるようになったものである。

7. おわりに

さて、このような経緯により、二上山山頂墳が大津皇子墓とされているが、種々の面から疑念が出されている。

- ① 謀反の罪により刑死させられた人物を、大和の平野部のどこからでも眺められ、聖域視されている山の頂に葬ることはない。
- ② ましてや、時の持統天皇の政治的思惑からしても、たとえ移葬を許すにしても、移葬先は極力目立たぬ場所を選ぶはずである。
- ③ 陵墓の設置に際し、7世紀後半のこの時期は、墓相を重視する風水思想にもとづく築造がなされており、山の頂への設置はあり得ない。

等の指摘である。これらの指摘は、肯ける面が多いと思われる。一方また、昭和58年には、大津皇子墓の可能性が高いとされる「鳥谷口古墳」が新たに発見された。

では、「二上山山頂墓」は何なのか。従来の経緯と現状を踏まえると、今は、「二上山山頂墓は、大津皇子を象徴し祀る社である」との認識が、最も妥当と思っている。

人々の「それでよし」とする思いが、山頂墓を存続させていると思う。

— 了 —

[註]

- [1] 西郷信綱 『古事記の世界』 岩波新書 1967.9
- [2] 香芝市市制施行10周年記念特別展 『大来皇女と大津皇子』 香芝市教育委員会 2001.9
- [3] 並河永 校訂 『大和志』 臨川書店 昭和62.12
- [4] 大石慎三郎 『吉宗と享保改革』 日本経済新聞社 1994.9
- [5] 司馬遼太郎氏は、『街道をゆく 24 近江散歩・奈良散歩』のなかで、享保8年(1734)から11年かけて完成した『近江国輿地志略』について言及している。
- [6] 「五畿内志」 『国史大辞典』第5巻 吉川弘文館 昭和59.12
- [7] 大津皇子の墓の可能性の高い「鳥谷口古墳」は、昭和58年に発見された。
奈良県文化財調査報告書 第67集 『鳥谷口古墳』
- [8] 本居宣長 『菅笠日記』 新日本古典文学大系『近世歌文集』 岩波書店 1997.8
- [9] 『大和志』では、「見瀬丸山古墳」を天武天皇と持統天皇を合葬する「檜隈大内陵」としている。
このことについて、既に同じ時代の『大和名所和歌集』では、「此説誤也」としている。

- [10] ここでの「並河の何某」の呼称が気になるところである。宣長は、貝原益軒については貝原翁と呼んでいる。『大和志』に対する宣長の評価が影響しているのかもしれない。
- [11] 金子朝一 『太子町・当麻の道』 綜文館 昭和 53.5
- [12] 奈良県立橿原考古学研究所 奈良文化財調査報告書 第 67 集 『鳥谷口古墳』
和田萃 「大津皇子の墓」 1994.3